荒川放水路と青山士（あきら）

■表紙写真　青山　士

昭和2年、青山は極度の疲労から肺炎になり、3ヶ月の療養を余儀なくされた。青山が長期にわたり現場を離れたのは、これが最初で最後である。この写真は病が癒えた後、荒川下流工事事務所主任から新潟土木出張所長に転任する際に、同僚や部下に贈ったもの。

荒川放水路

荒川は名前の通り、かつては「荒れる川」で毎年のように氾濫を繰り返していた。

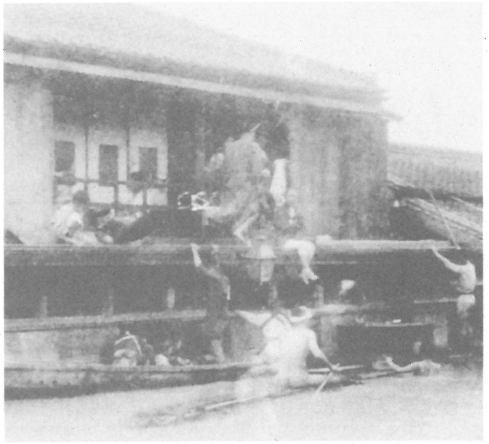
明治40・43年に、東京の下町に壊滅的な大洪水が襲い、それを契機に着手されたのが荒川放水路開削事業である。

この工事は北区岩淵に水門を造って隅田川を仕切り、岩淵の下流から中川の河口方面に向けて延長22km、幅500mもの放水路を掘るという大規模なもの。洪水時には隅田川の増水を抑え、洪水の大部分を幅広い放水路で一気に海へ流下させるのである。

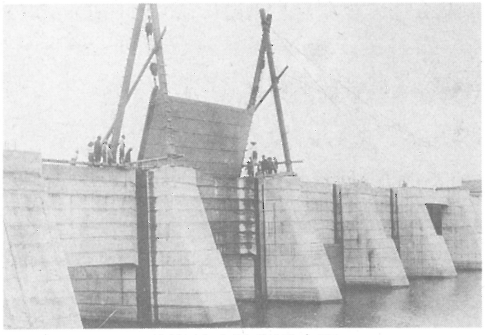
建設には明治44年から昭和5年までの19年間を要し、その間第一次世界大戦に伴う不況や関東大震災などで工事は困難を極めた。

工事の最高責任であった青山士は、試行錯誤の連続の中で常に現場に出かけ、作業員の一人として工事に加わった。

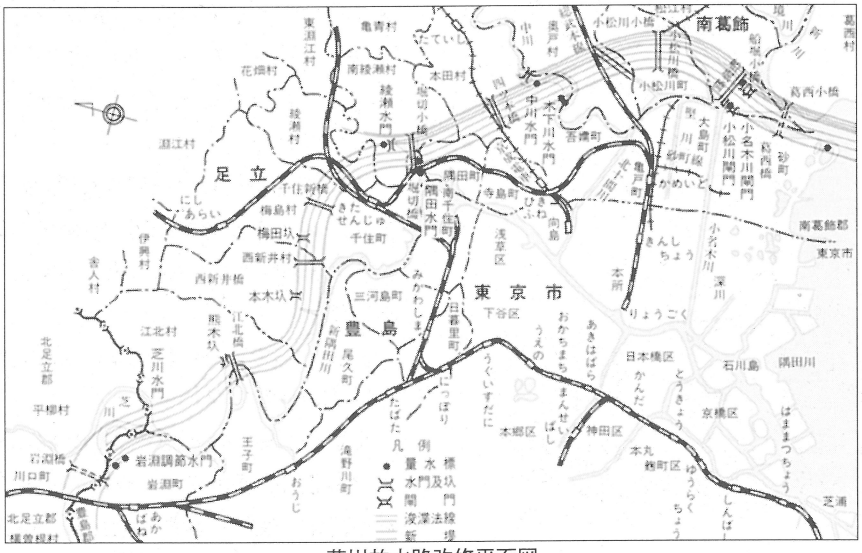
荒川放水路は、延べ310万人の労働者による、汗と涙の結晶なのである。そして、通水から75年経った現在も、首都・東京の治水の要として、その役割を十二分に発揮している。



浅草区山谷方面階上避難濁水漲流陸上浸水5尺余



荒川放水路岩淵水門



荒川放水路改修平面図

洪水をふせぐ人 ―荒川放水路をひらいた 青山(あおやま) 士(あきら)―

神戸(かんべ) 淳吉(じゅんきち)

荒々しい川

朝から荒れていた風は、夜になるとますます激しくなってきました。雨もまるで、滝のように降っています。すべてのものを吹き飛ばし、押し流すようないきおいです。

ラジオは何度も、臨時のニュースを伝えていましたが、それも、ぷっつり、電燈が消えると、もう、何もいわなくなりました。聞こえるのは、ものすごい台風の叫びだけ。台風が関東地方を我がもの顔に暴れ回っているのです。

今から数年前の八月のことです。

「荒川は、大丈夫だね。」

「大丈夫だとも。利根川は暴れても、荒川は心配ないよ。」

東京の下町に住んでいる人たちは、雨が激しくなっても、決して荒川の水があふれるようなことはないと、安心していました。

しかし、30年ほど前までは、とてもこんなのん気なことなど、言ってはおられません。東京の真中を流れている川……隅田川の上流・荒川は、大雨や梅雨が長引くと、決まって洪水になりました。

この隅田川は埼玉県の秩父の山奥から流れ、上流を入川(いりかわ)、中流を荒川、東京へ入り千住大橋のあたりからは隅田川といい、同じ川でも名前が三つも変わります。

けれど、ふつうの、この川のことは荒川と呼んでいますが、全くその名の通り、荒々しい川なのです。

東京を江戸といった350年ほど昔から、明治の末頃まで、だいたい300年あまりの間に、なんと113回も大水があふれているのです。三年に一度、江戸の町は家を流されたり、水浸しになったわけです。もちろん、これは荒川だけがあふれたのではありません。関東平野を東に流れ、太平洋へ注ぐ利根川が、荒川と同じように洪水になり、それがたびたび、一緒になって、どっと東京へ流れ込むことが多かったのです。

中でも、最もひどかったのは明治43年の8月です。荒川の土手は切れ、利根川の水があふれ、東京の下町は一面、泥海になってしまいました。

それから40年……もうこんな大洪水を繰り返しては大変です。

建設省の係の役人たちは、赤羽にある荒川の岩淵水門へ朝からつめかけていました。この水門は、荒川の水をせきとめ、隅田川へ水

を加減して流す仕掛けになっています。一方、その隣に新しく掘った大きな川……荒川放水路へ、せきとめられた荒川の水を落とすようにしてあります。

これは明治の洪水に懲(こ)りて、それを防ぐため、国が作り上げたものです。

その岩淵水門のそばで、さっきから、雨風にたたかれながら、じっとにごった水を見つめる一人の老人がいました。作業衣にゲートルをつけ、しっかりとした身ごしらえです。

びしょぬれの老人

「だれです。危ないじゃありませんか。」

水門を見まわりに来た役人が、老人を見つけ、ぎょっとしました。嵐の晩、何の用事があって水門のそばに立っているんだろうと、懐中電燈を、近づけました。

「あっ。」

びしょ濡れの老人を見て、役人ははっとしました。

「あなたは、青山さん。青山さんではありませんか。」

「やあ。ごくろうさまです。」

青山と呼ばれたその老人は、引き締めた顔をほころばせて、あいさつをしました。水門と放水路を作った青山士技師だったのです。

「どうなさったのです。こんな晩に……。」

「いやあ、台風のニュースを聞いているうちに、なんだか心配になってね、急いでやって来たんだよ。でも、まあ、これぐらいの水なら、水門も、隅田川も心配はないね。」

「それじゃあ、青山さんは静岡の磐田(いわた)からわざわざおいでになったんですか。」

「そうだよ。さっき、駅に着いたばかりさ。事務所へ先に寄ればよかったが、気になったものだからね、あはは、いやあ、心配をかけてすまなかった。」

青山さんは顔をふきながら、いいました。

この水門などの工事をしてから30年、今もなお、大雨のごとに駆けつけてくる青山さんに、役人はまったく、頭の下がる思いでした。その晩は、青山さんの言うように、もうそれ以上、川の水かさは増えませんでした。荒川の水はとうとうと放水路へ流れていきました。また、隅田川の川すじの人たちも、無事に台風の一夜を過ごすことができました。

パナマ運河で勉強して

青山老人が、水門と放水路を手がけたのは働き盛りの34才の時です。そのころ、青山さんがパナマから帰ってきたばかりでした。フランスのレセップスが、パナマ運河の大工事を始めると聞いたのは、青山さんが東京大学の土木工学科を卒業する年でした。1903年（明治36年）青山さんの25才の時でした。

「パナマへ行って、パナマ運河の工事をしてこよう。狭い日本にいるより、世界を相手に日本人の力を見せてやったほうが、国のためだ。」

青山さんは卒業すると、すぐに、たった一人でパナマへ旅立ちました。もちろん、パナマ行きについては、青山さんが最も尊敬している内村鑑三先生にも相談しました。

その当時、内村先生は、人に頼らず自分の家で、キリスト教の講演会を開いていて、多くの人々を導いていたのです。青山さんは日曜日ごとに、その内村先生を訪ね、聖書の話を聞いていました。その頃、内村先生の弟子には、青山さんをはじめ、仲の良い友人の大賀一郎博士もいました。大賀博士はハスの研究家として有名で、今、東大教授でもあります。この他、東大総長になった南原繁、矢内原忠雄という優れた人たちもいました。内村先生の教えを受けて、青山さんやこうした人たちが、世の中へ出たということは内村先生がよほど立派な人だったといえましょう。

さて、内村先生からも、励ましの言葉を受け、パナマへ発った青山さんは、そこで8年間、運河の工事のために働きました。ところが、

「青山はスパイだ。日本人をパナマから追い出してしまえ。」

と言い出す者が出てきました。

アメリカ人は、パナマ運河のような大切な所で、外国人が働くことを面白く思わなかったのです。そこで、つまらないうそを言いふらしたのです。青山さんはくやしくてなりません。けれど、覚悟を決め、日本へ戻ることにしました。日本へ帰って来た年は、1911年（明治44年）1月、つまり、大洪水のあった五ヶ月ほど後でした。

人工の川つくり

さっそく、3月から、青山さんは荒川をなおす工事をするために迎えられました。内務省にある東京土木出張所の技官になったのです。青山技師はそこで、始めのうちは、設計のほうを受け持ちました。そして、まず、水門をつくること、新しい川を掘り、東京湾まで荒川の水を流すことなどを、みんなで決めました。荒川放水路というのがそれで、岩淵町から隅田川と分かれ、足立、葛飾、江戸川と三区を通り、海へ入るようにしました。この人工の川ができれば、もうどんなに荒川の水かさが増えても、心配はなくなるはずです。

しかし、こういう大工事はなかなか思うように、すすむものではありません。青山技師はウシのように粘り強く、あせらずに、しっかりと、工事を進めていきました。

五年ほどすると、青山技師は工事事務所の主任になりました。そして、ますます、忙しく働いている時、関東大震災が起こりました。1923年（大正12年）9月1日です。このため、東京中の家は倒れ、火事のためすっかり灰になってしまいました。

「や、これはどうだ。岩淵の水門は、びくともせず建っているぞ。」

人々はびっくりしました。ひび一ついらず、どっしりと荒川にふまえて建っているのです。青山さんの人柄を思わせるように、しっかりとした水門でした。

また、長さ22km、幅450mもある放水路もしだいにしだいに掘られていきました。一方、隅田川の土手も、堅く、頑丈に造りなおされ、出来あがったのは大正13年でした。

それから今日まで30年、あれほど荒れた荒川の水も、ただの一度だって、あふれたこと

がありません。だからといって、青山さんは決して安心してはいません。勤めを辞め、歳をとって、静岡の田舎に引っ込んでいても、いつも川のことが頭にいっぱいなのです。

昭和22年9月、カスリン台風の時は、9mの水門を、すれすれになるまで水が押し寄せてきました。けれど、水門はがっちり水を防ぎとおし、また、一滴の水も東京の町へ落としませんでした。もちろん、その時、青山さんはイの一番駆けつけてきたことは言うまでもありません。

こういう人柄の青山さんですから、戦争中、こんな話があります。一人の軍人が青山さんを訪ねてきました。

「あなたはパナマ運河の工事に、技師として向こうへ行っておられたそうですが、一つ、ご相談があります。」

軍人はそこで、声をひそめ、

「ご承知のように、パナマは日本の敵国です。いざという時には、パナマ運河を爆弾でつぶそうと考えています。それには、どういう風にすれば良いか、お教え願いたいのです。」

「なに、つぶす？」

青山さんはじろりと、目をむくと、

「私は、造るほうなら、よく知っています。けれど、壊すほうは、いっこうに存じません。」

そう言ったきり、青山さんは、二度と、軍人に口をききませんでした。

また、岩淵水門のすぐそばに、ひと抱え程の丸い石が置いてあります。記念の石です。その石には、金属板がはめ込んであり、こういう意味の短い言葉が刻んであります。

工事を仕上げた、多くの、
我等の仲間がいるが、
その人たちの苦しみや力を、
いつまでも忘れないために
荒川の工事に加わった者たちによって

このほかに、年月日だけが彫ってあり、どこにも、あの大工事を仕上げた青山士の名前は記してありません。青山さんは、自分の名前を書き残しておくことなど、少しも考えていないのでした。それよりも、水門や放水路によって、洪水が防げたことのほうが、何倍もうれしいのです。

来栖良夫編：「少年少女世界伝記全集・1」所収　「町や村を守った人々」
昭和33年4月25日第一刷発行：宝文館より発行

運命の皮肉

青山　士

僕は学校卒業後パナマ運河に居り、明治45年帰国して職を求めておったが、恩師広井勇先生に紹介状をもらって内務省の近藤虎五郎課長に面会したが、近藤先生は「君は何年に学校を出たのか」と言われて、36年ですとお答えした。一寸お考えの後「それでは荒井釣吉、市来尚治君と同年だな」(この両人は已に内務省に就職しておった)「それでパナマでどんな仕事をしておったか」と言うことであったから、測量、地質調査、製図、設計等をしておりましたとお答えしたら考えて「その内通知するからまた来るように」と言うことであった。数日の後採用が決まって、先ず広井先生のところへ伺ってそのことを報告しましたら、先生は、「それはよかった。併し君日本の官吏になったら「トコロ天」になったと思って辛抱しなくては勤まらんぞ」と御注意をして下さいました。それから内務省へ出頭して沖野技監に御面会した。沖野さんは「君はパナマで働いて居ったと言うから、削鑿の方も見て居っただろうが、信濃川大河津分水路の掘鑿の方へ行かんか」と言われた。僕は一寸考えて見たが土石掘鑿の方は見飽きて居ったから、分水路の方へ行かなければ御採用出来ないと言うならば、私は内務省に入らなくてもよいと言い切ってしまった。そうすると技監は暫くお考えになった後、「そうか、それなら荒川下流改修工事にも仕事があるから、その方へ行ってもらうかな」とお話になって、東京土木出張所の荒川改修従事の辞令をもらったような訳であった。そこに勤務すること約15年で、その後大河津自在堰の事故が、昭和2年の夏に突発したので、その後始末に行くことを命ぜられ、同年12月吹雪の中を赴任した。その時は勿論分水路の掘鑿は終わっておったのであるが、遂に新潟へ行くことになり、そこに6年半ほど在勤することになって仕舞った。運命と言うものは不思議なものだと痛感。その位いのことで沖野技監との接触は極めて少なかった。

荒川改修工事に従事中2・3度巡視に見えたが、いで立ちは革の長靴で、細かいことにも注意せられて、築堤土中に芦根等の雑物が入っていると取除くことも注意せられたことを覚えている。なお明治の末期頃は工事も段々機械化され、材料も煉瓦からコンクリート、鉄筋コンクリートに変わりつつあった。僕が荒川に従事中、先ず岩淵水門の設計に取りかかった時、基礎を杭打にし、その上に鉄筋コンクリートの広い床板を載せることとし、外の部分はみなコンクリートまたは鉄筋コンクリートとして、時の東京土木出張所長近藤仙太郎氏と沖野技監のところへ承認を求めに行ったところ、技監は杭打と床板に就いては大いに批判せられ、杭打を止めて井筒基礎とし、床板を廃するよう主張せられたが、僕は若気で広井先生のトコロ天の比喩も忘れて、工期の短縮と工事の節約を主張して譲らなかったところ、丁度下関土木出張所長原田貞介さんが来合せて居られ、妥協案として杭打を止め、井筒基礎とし、鉄筋コンクリート床板を平板を併用すると言うことで承認を受けました。

以上沖野技監の設計および施工に就いての細心の、御注意は深く敬服している次第であります。

内務省直轄土木工事略史『沖野　博士傳伝』より

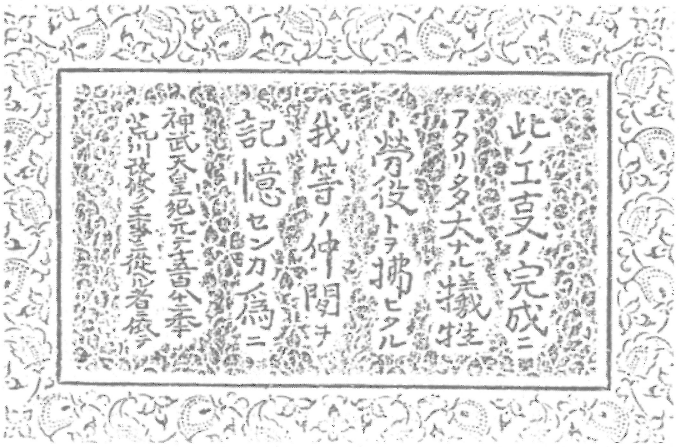
荒川放水路完成記念碑と銘板の拓本

放水路完成当時、荒川下流改修事務所主任技師（現　工事事務所長）であった青山士及び、工事関係者一同が工事の犠牲者を弔うために資金を出し合ったものである。

台座は富士川の転石を、銘板の模様は当時の荒川河川敷を埋め尽くしていた桜草をあしらい、北原三佳が製作した。

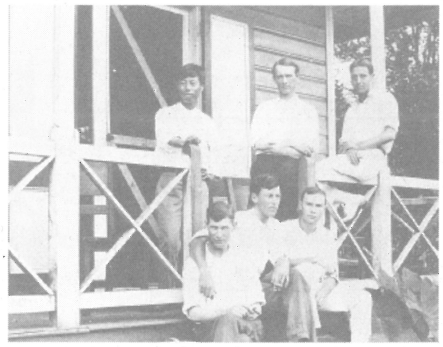
放水路工事の最高責任者であり、功労者でもある青山士の名前はどこにも記されていない。「巨大な土木事業は関係者全員で造り上げていくものである」という青山の精神が簡潔に刻まれている。

荒川放水路完成記念碑



銘板の拓本

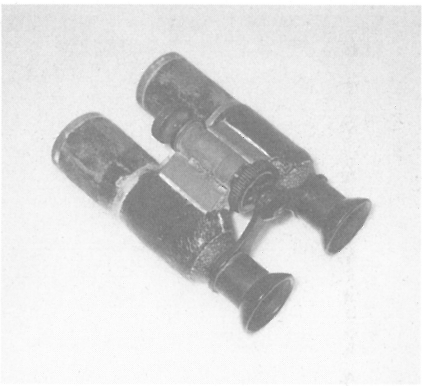
パナマ時代（1904～1911年）



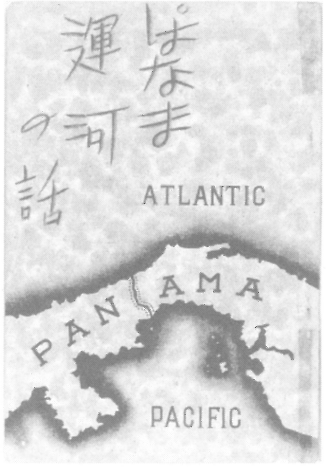
1907年　ガツンにて

1909年　ガツンの私の城

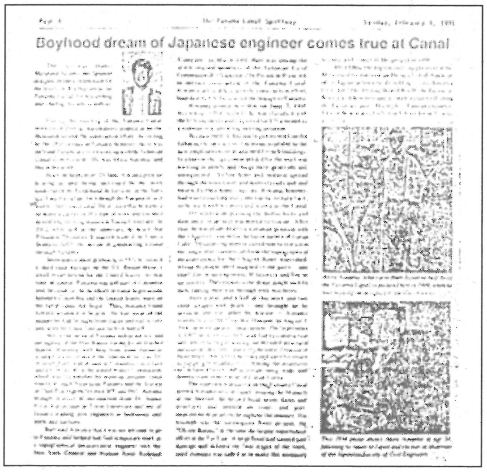
1911年　チャグレス川・河口のビーチにて同僚と



青山が愛用していた双眼鏡（当館所蔵）



1939年に青山士が自費出版した。（当館所蔵）
はしがきに「私自身ガ全身汗みどろニナツテ働タ其工事ノ事及ビ私ガ其時見タ事及ビ感ジタ事ヲ書キ付ケテ…」とある。



Boyhood dream of Japanese engineer comes true at Canal

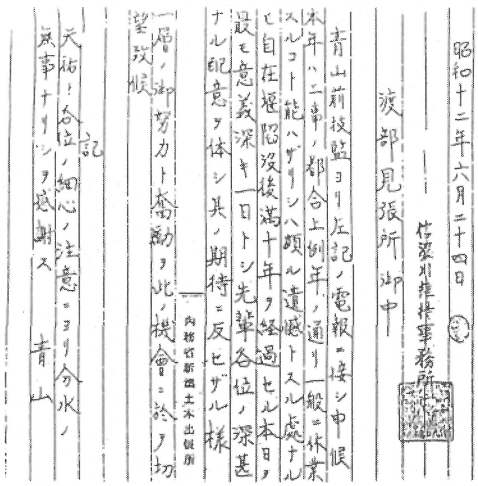
1991年に長野正孝氏が書いた青山の記事。見出しに『パナマ運河で少年時代の夢かなう日本人技師』とある。

新潟時代（1927～1934年）

大河津分水補修工事竣工記念碑に記されている言葉

PORLA VOJO DE LA HOMARO
KUN PEN OJ DE LA HOMARAMO
（訳）人類の願望の為め、人類愛の努力をもって

長野・中山道の難所、和田峠にある和田嶺トンネルに記されている言葉


昭和十二年六月二十四日
信濃川復興事務所
波部見張所御中
青山前技監ヨリ左記ノ電報ニ接シ申候
本年ハ二事ノ都合上例年ノ通リ一般ニ休業スルコト能ハザリシハ頗ル遺憾トスル處ナルモ自在堰陥没後滿十年ヲ経過セル本日ヲ最モ意義深キ一日トシ先輩各位ノ深甚ナル配意ヲ体シ其ノ期待ニ反セザル様一層ノ御努力ト奮勵ヲ此ノ機會ニ於テ切望致候
内務省新潟土木出張所
記
天佑！各位ノ細心ノ注意ニヨリ分水ノ無事ナリシヲ感謝ス　青山

『天佑ト各位ノ細心ノ注意ニヨリ分水ノ無事ナリシヲ感謝ス　青山』

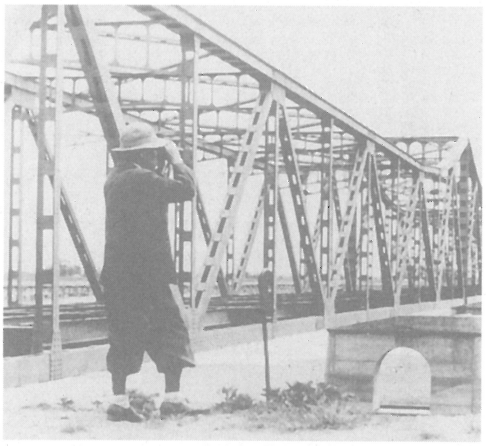
1927年	6月	自在堰陥没事故発生
	12月	青山は新潟土木出張所長に就任
1931年	6月	補修工事・可動堰完成式

版画家・棟方志功も感銘を受けた「人類の為め、国の為め」の言葉を残して青山が新潟を去った後も、毎年出張所宛てに電報を打って、維持管理の注意と所員の健康を祈った。

左の文書は、青山の電報を紹介したもの。

技師としての青山 士

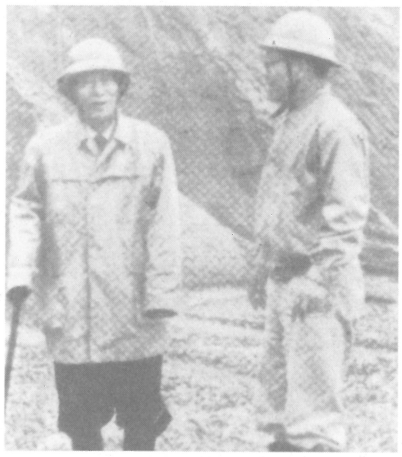
北陸の砂防ダム視察



晩年も荒川を視察に訪れた

青山は洋服姿で腰に手拭いをいつもぶら下げ、現場に出るときは、必ずゲートルを巻いていたのは、有名である。

梅雨や台風の季節になると、青山は夜間、雨に打たれながら雨ガッパにゴム長靴を履き、手に懐中電灯を持って工事現場を見て回った。

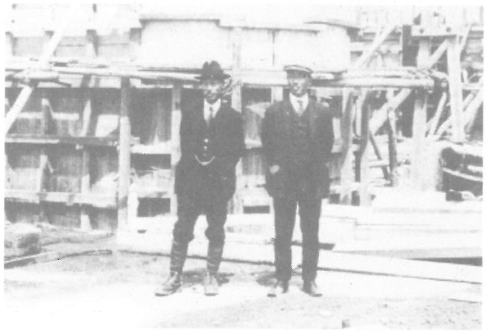


奥只見川にて

新潟土木出張所長だった青山 士と信濃川補修事務所主任の宮本武之輔

性格的にはまったく正反対であったが、宮本は青山のことを尊敬していた。14歳年下の宮本も、東京帝大土木工学科で、二人とも主任教授・廣井勇の指導を受けた。青山を静（思索型）とすれば宮本は動（行動型）と両者の人格はまったく異なるが、両者共に戦前の土木技術界を代表する天才的技術者といえる。

【高崎哲郎著「工人・宮本武之輔」より一部引用】

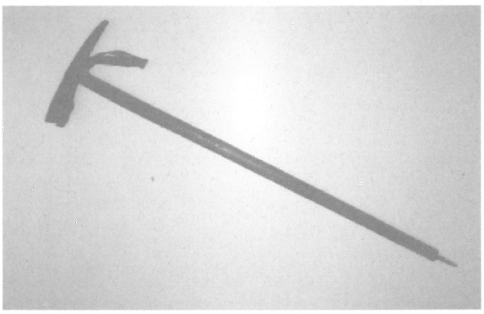


大河津分水工事現場　青山氏（左）、宮本武之輔（右）

大病を患った後、登山とスキーをはじめた…

青山は新潟土木出張所長時代(48才頃)に、登山とスキーを覚えた。

登山は、夏に山の仕事場へ視察かたがた登るようになり、立山・白山はよく登った。左下の写真は、青山が登山の際愛用したピッケル（当館所蔵）である。



スキーは「まず、基礎から」と毎朝、新潟高校の校庭で平地行進を繰り返し練習した。その甲斐あってメキメキ上達し、毎年2月11日を中心に職員を集めて妙高高原でスキー大会を催すまでになった。

妙高高原でスキーをする青山　士

青山 士ゆかりの花 アメリカハナミズキ

1968年10月20日

荒川放水路・岩淵水門(現　赤水門)近くに、むつ夫人をはじめ青山一家で青山の好きだったアメリカハナミズキの苗木6本を記念に植えた。

現在、このアメリカハナミズキは荒川知水資料館横に移植され、季節が来ると、赤や白のきれいな花を咲かせる。

ハナミズキ満開のころ

椰子の生い茂るパナマにて

故郷の友人から書き送られた島崎藤村の詩「椰子の実」を読んだとき、こみあげるものがあり、感慨無量になった。

当時、パナマの熱帯雨林で、連日厳しい測量作業を続けていた。

名も知らぬ　遠き島より
流れ寄る　　椰子の実ひとつ
故郷の岸を　はなれて
なれはそも波に　幾月…

1909年10月、パナマ運河地帯ガツンにて、青山が椰子を植樹したときの写真

青山 士とキリスト教

内村鑑三との出会い

一高の寄宿舎で同室だった友、浅野猶三郎にすすめられ神田教育会館での内村鑑三の講演「日本の今日」を聞いて感銘を受け、弟子入り。このとき青山　士は22才、明治32年のことだった。

内村　鑑三先生

角筈(つのはず)十二人組

毎週日曜日午前、内村鑑三の講義後、弁当持ちで中野の十二社より少し隔たった小丘の上にあった六畳一間の離座敷で聖書研究会が開かれていた。そのメンバーの青年12名が、「角筈十二人組」と呼ばれた。

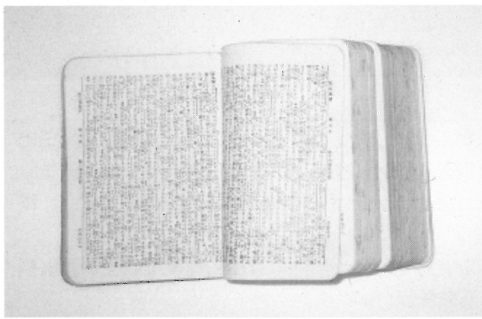
メンバーには、小山内薫(作家)や大賀一郎(東大教授・理学博士)もいた。

廣井　勇先生

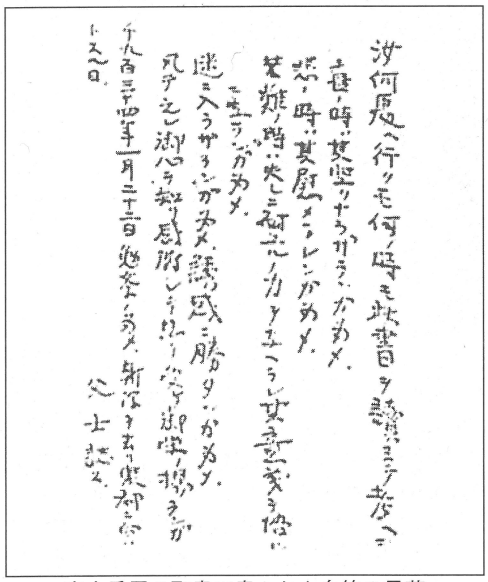
二人の恩師

青山の恩師・帝国大学土木工学部教授　廣井　勇は、内村鑑三の札幌農学校時代からの友人で、武士道的クリスチャンであった。

青山は、学生時代から晩年に至るまで自宅自室の机の上に、内村・廣井両師の顔写真を置いていた。



青山愛用の聖書



青山愛用の聖書に書かれた自筆の言葉

人生のモットー

"I wish to leave this world better than I was born."

私がこの世を去るときには、生まれてきた時よりも良くして残したい

青山の師・内村鑑三が「後世への最大遺物」の中で紹介したイギリスの天文学者　ジョン・ハーシェルの言葉。

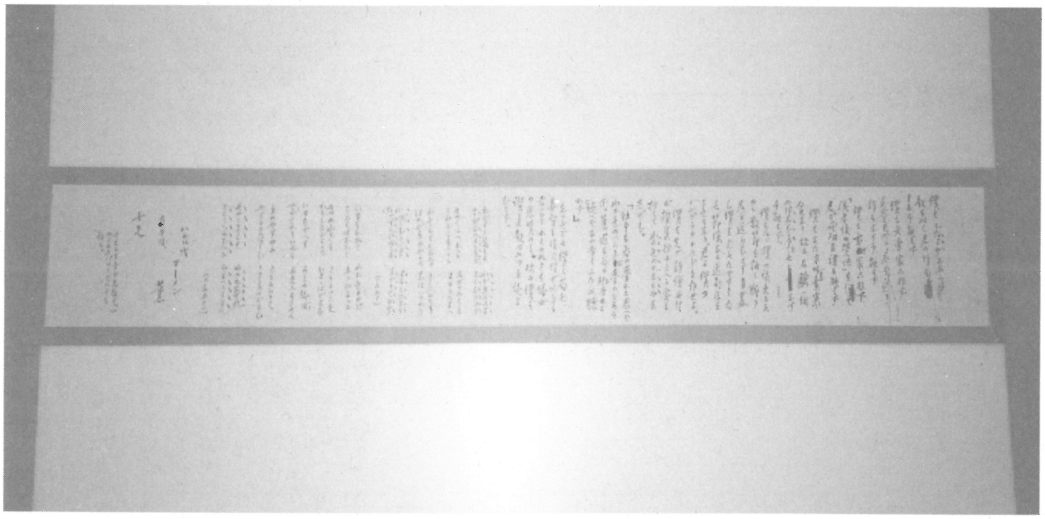
広く世の為になる仕事を、と土木工学を一生の仕事とし、洪水が襲い疫病が蔓るこの大地を少しでも良くして後世に残したいというのが、神から示された青山の使命だった。

クリスチャンとしての青山 士

彼は一介の技師ではなかったと同時に、いわゆる世のクリスチャンとは異なってその信仰は地についていた。人間的な教養と日本的＝東洋的な趣味に豊かで、漢詩や俳句も愛誦した。それは、青山家父祖伝来の精神かと思われるが、彼はよくその土台にキリスト教信仰を接木した人と称していいであろう。令嬢が嫁ぐときに日本の武士の家庭習慣に従って、一振りの懐剣を与えたということであるが、そこには趣味以上に、その性格と精神がよく象徴されている。

青山さんはその名の示すごとく、実に士(さむらい) らしい基督者であった。彼はそれほど、祖国日本とその伝統を愛した。だがそれと同時に、いや、それ以上に人類と正義を愛した。

《南原　繁「青山　士さんの生涯」より抜粋》



この書簡は、後に作家となる小山内薫が、渡米前の青山に宛てて送ったものである。二人は共に内村鑑三門下生として、新宿角筈にあった内村の自宅で毎週開かれた聖書講読会に参加するなど熱心にキリスト教を学ぶ同志であった。明治36年8月10日、内村門下の「角筈十二人組」のメンバーは青山のパナマ行きを祝し、横浜本牧に小舟を浮かべて送別会の宴を開いた。

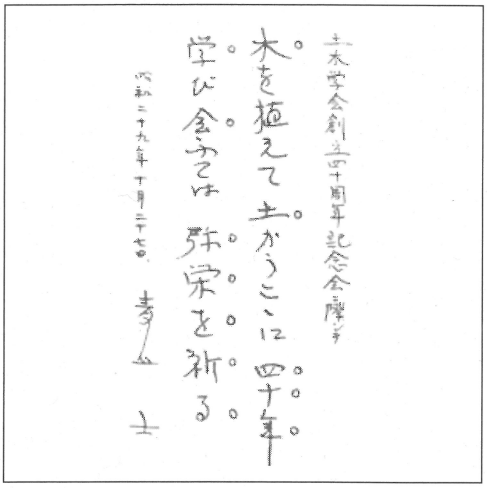
この書簡からは、経済的理由からこの宴に参加できなかったと思われる小山内の青山に対する親愛の情と篤い信仰心が垣間見え、その文学的な表現と相まってたいへん興味深い。

書簡のコピーは、青山氏の長女で米国在住・白戸　まささんより寄贈されたもの（当館所蔵）

青山　士　語録集

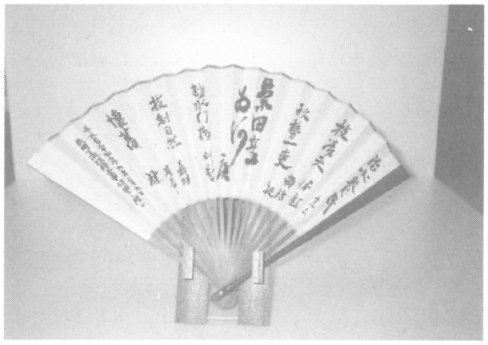
工人は死せず。
工人は死せず
只々消えて行く。
只々消えて行くとは云わじ。
人類の為に。多くの善き文化的
記念物を残して。逝く。

「真田秀吉君追悼号」に青山がよせた真田博士追憶

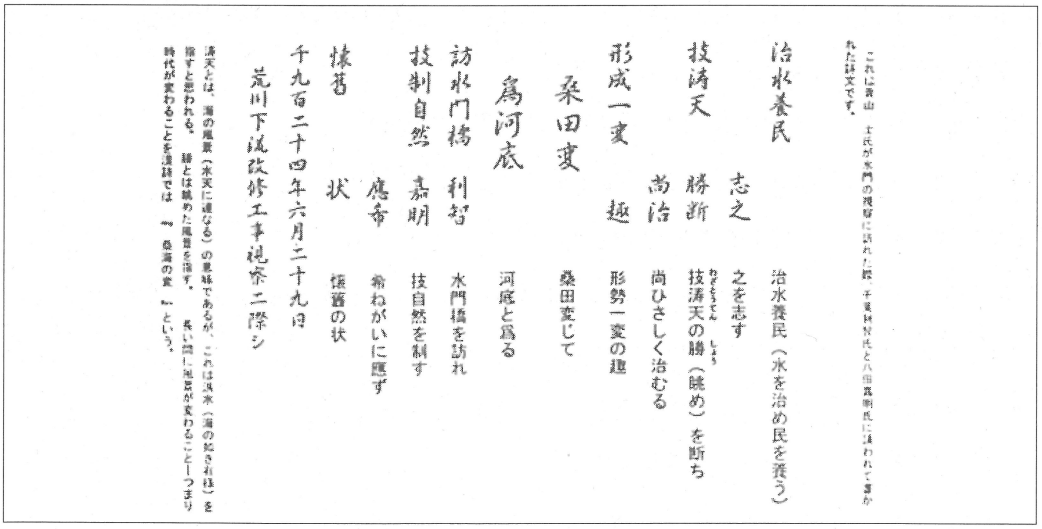


僕は明治11年生れで、学校を卒業したのはやはり明治36年7月の11日、

パナマに行くために船に乗ったのはまた同年7月の11日、彼の地に着いたのも翌月の11日そうして帰朝したのは1911年の11月11日、その船室が11番、等々で實に僕にとっては11と云ふことは奇々しい何等かの因縁を持っている、又僕の名は明治11年に生れたので父が十一と名付けるのも何等か變であったのであろう、士（あきら）と付けたが、これは凡て明らか即ち博士の意味だそうだが、文字では十一のように見えるのであろう。



当館所蔵の扇子


これは青山士氏が水門の視察に訪れた際、千葉科智氏と八田嘉明氏に送られて書かれた詩文です。

治水養民　志之
技清天　勝断　尚治
形成一変　趣
桑田変
為河底
訪水門橋　利智
技制自然　嘉明
鷹希
懐旧　状
千九百二十四年六月二十九日
荒川下流改修工事視察ニ際シ

治水養民（水を治め民を養う）
之を志す
技清天の勝（晴れ）を断ち
尚ひさしく治むる
形勢一変の趣
桑田変じて
河底と為る
水門橋を訪れ
技自然を制す
希ねがいに應ず
懐旧の状

清天とは、海の風景（水天に連なる）の意味であるが、これは汚水（海の汚れ状態）を除すと思われる。勝とは晴れた風景を指す。長い間し風景が変わること―つまり時代が変わることを漢詩では　〝桑海の変〟という。

青山　士(1878～1963) 年譜

1878(明治11)年	静岡県豊田郡中泉村（現　静岡県磐田市中泉）に青山徹　ふじ夫妻の三男として生まれる
1892(　同　25)年	小学校卒業後に上京、尋常中学校（現　日比谷高校）に進学
1896(　同　29)年	第一高等学校予科二部に入学（寄宿舎の同室に浅野猶三郎）
1899(　同　32)年	東京帝国大学工科大学土木工学科に入学
1903(　同　36)年	大学卒業後、パナマ運河開削工事に参加するため、単身、横浜港を出発する（25才）
1904(　同　37)年	ニューヨーク・セントラル・アンド・ハドソン河鉄道で働き、6月・パナマ運河工事に、青山は末端測量員として着任
1906(　同　39)年	ガツンダム工事開始、青山は設計技師として携わる
1911(　同　44)年	ガツン閘門（こうもん）建設工事開始、のちにやむなく日本へ帰国　日本では荒川放水路工事が着工される
1912(　同　45)年	内務省東京土木出張所・内務技師として、荒川改修工事に参加（33才）
1914(大正　3)年	パナマ運河開通
1915(　同　　4)年	土田むつと結婚 荒川改修事務所岩淵水門工場に主任として勤務、後に工場主任になる
1918(　同　　7)年	荒川改修事務所岩淵工場に主任として勤務、後に事務所の主任になる
1924(　同　13)年	10月12日、荒川放水路通水式（46才）
1927(昭和　2)年	新潟土木出張所の所長に就任
1928(　同　　3)年	都市計画新潟地方委員会委員をはじめ数々の委員、顧問を務める
1931(　同　　6)年	大河津分水可動堰が完成
1934(　同　　9)年	内務省第五代内務技監に就任、叙高等官一等
1935(　同　10)年	土木学会第23代会長を兼任する（任期は1年）
1936(　同　11)年	内務技監を退任（58才）
1937(　同　12)年	「土木技術者の信条及実践要綱」をまとめ土木技術者のあり方を問う
1939(　同　14)年	「パナマ運河の話」発刊（60才）
1950(　同　25)年	土木学会名誉会員になる
1963(　同　38)年	3月21日、逝去（84才）

■当館所蔵の青山 士氏関連文献

■「パナマ運河の話」 青山　士／著(自費出版・非売品・1939年)

■「ニューエイジ」　ニューエイジ社・1949年2月号

■「青山　士君　追悼号」 旧交会・1963年10月(非売品)

■「新潮45」・1998年7月号　(新潮社)

■「技師・青山　士の生涯」 高崎哲郎／著(講談社・1,600円・1994年)

■「写真集　青山　士　後世への遺産」　(山海堂・2,600円・1994年)

■「熱い河」 三宅雅子／著　(講談社・1,800円・1998年)

■「道徳6　明日をめざして･北区版」 (東京書籍)

■ 演劇シナリオ「幻を追う人(一幕)　―水門を作った人々―」
山口唯七／作(非売品・1964年)

■ 青山　士氏関係資料　A：青山氏自身の著述・講演等　No.1～39

■ 青山　士氏関係資料　B：青山氏に関し、他の人が書いたもの　No.1～38

■ 青山　士氏関係資料　C：青山氏に関する関係文書等　No.1～98・全4冊
(青山　士氏関係資料は、すべて非売品)

■「パナマから消えた日本人」 山本厚子／著(山手書房新社・1,600円・1991年)

■「工人・宮本武之輔の生涯」 高崎哲郎／著(ダイヤモンド社・2,200円・1998年)

上記すべての関連文献が館内・ライブラリーや青山　士コーナーにて閲覧できます

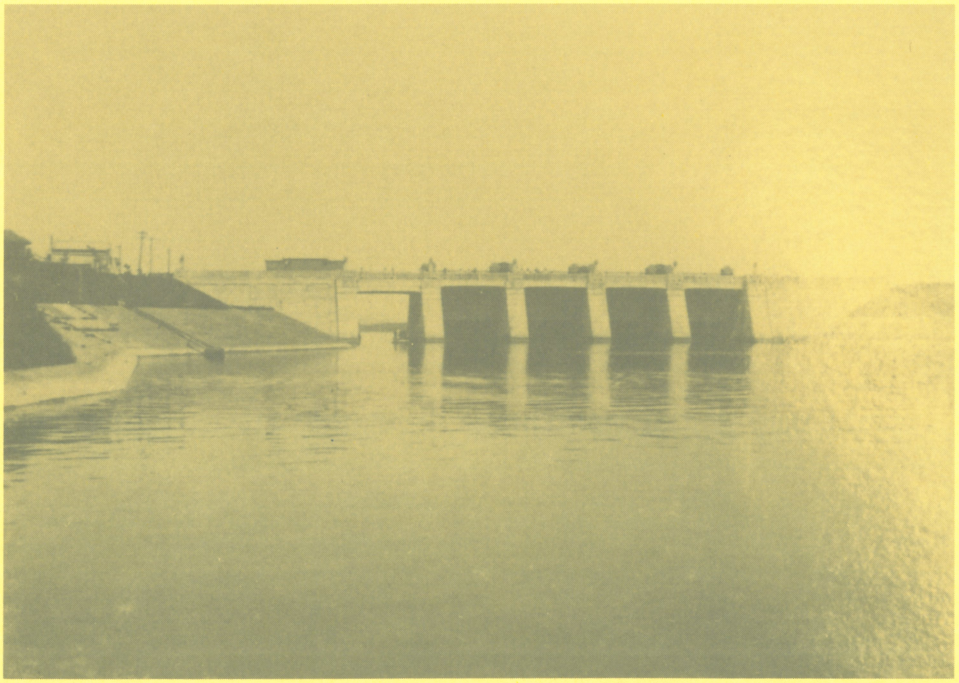
荒川放水路と青山士

平成11年10月発行
発行　荒川知水資料館
〒115-0042　東京都北区志茂5-41-1
TEL:03-3902-2311（代表）　地域連携課
http://www.ktr.mlit.go.jp/arage/index.html
非売品

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOYINK
環境に配慮した大豆インクを使用しています

■裏表紙写真　旧岩淵水門

裏表紙の旧岩淵水門は、荒川放水路開削工事と共に建設。青山士がパナマで学んだ世界最先端の土木技術を活かし、鉄筋コンクリートで造った。
当時、「そんなに頑丈に造る必要があるのか」との声もあったが、工事途中に起きた関東大震災にはびくともしなかった。



旧岩淵水門